月刊

いじろのとも

第十四卷

一月号

子どもも墮落している

いま子どもたちの

学力低下が

叫ばれている

でも

低下しているのは

学力だけではない

体力も

年々低下している

運動も勉強も

しなくなつた

子どもたち

部屋にこもつて

テレビを見たり

ゲームをしたり

パソコンをいじったり

そんなことをするだけの

毎日なのか

夢もなければ

希望もない

ただだらだらと

樂をし

楽しんで

毎日を過ごしている

そんなイメージが

わいてくる

人生を考え直して

みたい人は（一〇八）

空海『即身成仏義』解説（一一）

〔四〕 2 六大の能生・所生

是の如くの六大、能（よ）く一切の仏、及び一切衆生・器界等の四種法身・三種世間を造す。故に、大日尊、如来発生の偈を説いて曰（のたまわ）く

能く随類形の

諸法と法相と

諸仏と声聞と

救世の因縁覚と

勤勇の菩薩衆とを生ず

及び人尊もまた然なり

衆生器世界

次第にして成立す

生住等の諸法

常恒に是の如く生ずと。

この偈は何の義をか顕現する。謂（いわ）く、六大能く四種法身と曼荼羅と及び三種世間を生ずることを表す。謂く、諸法とは心法なり、法相（ほつそう）とは色法なり。また次に、諸法とは、通名を挙ぐ。法相とは差別を顕（あら）わす。故に、下の

句に「諸仏・声聞・縁覚・菩薩・衆生・器世間、次第に成立（じょうりゆう）す」と云う。

今月号は少し変わった現代語訳を引用させて頂きま
す。現代語訳というより、解説といった方がよいかも知
れません。それは、いつかあげたことのある金岡
秀友訳・解説『空海即身成仏義』（太陽出版刊）のもの
です。

* * * * *

いままで『大日経』と『金剛頂経』からの引用文を証
明のための論理的根拠としてあげ、「六大」の実体につ
いて説明してきました。次に、「六大」がその働きとし
て、すべての仏や菩薩たちと、一切の衆生と衆生の生活
するところ（器界（きかい）等）などの「四種法身」と
「三種世間」とを造ることを説かれますので、大日如来
（尊）は『大日経』の中で、『如来発生（ほつしょう）
の偈』に、次のようにおっしゃいます。

よく子どもに対しては子どももの姿をとるとい
うように、相手の状態にしたがった類形（随類形）ずい
いぎょう（）としての諸々のもの（諸法）と、その姿、形（法
相）と、諸々の仏と、仏の説法の音声聞いて個人的に
悟った声聞（しょうもん）と、仏の説法に出会わずに、

独りで因縁の道理を悟り、他の衆生の幸福を考える（救世）縁覚と、衆生の成仏を願って心力をつくし、勇気をふるい起こして、どのような苦しみにあっても修行を怠ることのない、（勤勇）菩薩たち、とを生ずる。加えて、尊いひとびと（人尊）もまた、そのように生ずる。衆生と、衆生の生活に関わる山河、大地、草木、建物などの場所（器世界）は、生滅変化の順番、すなわち、成立し、存続し、こわれ、何もなくなる、という次第に従って成り立つ。生起（ししょうき）成立、安住（存続）、衰異（すいゐ）（こわれ）、破滅（何もなくなる）という、いわゆる生住異滅（しょうじゅういめつ）の四つの状態を永久に繰り返して、世界のありとあらゆるものがそのように生ずるのである」と。（『大日経』巻五、秘密曼荼羅品第十一）

この偈は、どのような意味をあきらかに表現しているのか、といたしますと、「六大」が、能く「四種法身」と「曼荼羅」と「三種世間」とを生ずることをあらわしています。

「四種法身」とは、法身のあらわれかたを四種類に分類した呼び名で、真理そのもの、すなわち究極・絶対の総合統一的真理である「自性法身」、自らの内に証明

され会得された法を他に受持活用させる他受用（たじゆゆう）と、如来自身が悟りの境地を味わい楽しむ自受法楽（じじゆほうらく）の身、すなわち自受用（じじゆゆう）との両面を併せ持つ「受用法身」、衆生の経験世界に対応してさまざまな形で認識され実践される「変化（へんげ）法身」、九界随類身ともいい、仏法を聞く相手と同じ姿になつて現れる法身で、すべての存在に遍満している「等流（とうりゅう）法身」、をいいます。

「三種世間」とは、仏・菩薩・縁覚・声聞の悟りの世界である「智正覚（ちしょうがく）世間」、有情界ともいい、天・人・阿修羅・畜生・餓鬼・地獄の世界である「衆生世間」、そして器界ともいい、衆生のいる器（うつわ）、場所である「器世間」をいいます。

細かく説明しますと、「諸法」とは、全体の名前、すなわち総称（通名）をあげたのであり、「法相」は、区別された分類名（差別（しゃべつ））をあらわします。すなわち、下の句に、種々の区別名を並べあげ、「諸仏・声聞・縁覚・菩薩・衆生・器世間、次第に成立（じょうりゆう）」といっています。

* * * * *

ここでは、「六大」が、あらゆる存在を生み出すものであることを述べているのですが、この解説的現代語訳

をお読み頂ければ、本文に対する解説は、殆ど不必要なように思えます。ただ、ここに書かれていない点を、少しだけ補足しておきたいと思えます。

まず、これまでの復習ですが、「諸法と法相」という時の「法」につきましては、詳しく十一月号で検討致しました。ご参照下さい。

また、「如来発生の偈」に対するお大師さんの解説にあります「四種法身」の「法身」につきましては、五月号で紹介しています。それを、この解説的現代語訳と合わせお読み頂ければ、真言密教が法身をどう考えているかが、お分かり頂けると思います。

さて、根本的な問題ですが、ここでは「六大があらゆる存在を生み出すものである」と述べているのですが、なぜそんなことが言えるのでしょうか。

現代の科学的知識によって考えますと、地・水・火・風・空・識という五つの物理的存在と識という人間の精神作用とが現実のすべての存在を作り出すというようなことは、とても常識にあわないように思えます。

もう、九月号でも述べましたように、六大はどこまでも根本的には「さとり境地」に基づくものかどうかという点です。それは、自分と如来さまとが一体になるという体験をすることで、自分とあらゆる存在とが一体である

という実感からあらゆる存在を再構成したものなので。私が、密教の「入我我入」の体験を基にして「自己・他己双対理論」を構築したようなものなのです。

六大として、私たちが最も身近に感じ、且つ、その当時の人々の科学的な知識になじむものを設定し（哲学的に言いますと措定し）、それによって、私たちの人的・物質的生活空間の全てを再構成しているのです。（それが、真に説得力ももつためには、弘法大師空海と同様な悟りの体験が、実は、必要なのですが。）

こう考えますと、ここにあげてあります「如来発生の偈」がよくご理解いただけるのではないのでしょうか。

そこでは、まず、最も、抽象性の高い「法」が挙げられ、ついでその法の体得者である仏や法を求める者について述べられます。そして、人々（衆生）、人々の生活世界、物理的世界と、現実の一般的世界へと降りていきます。

現代人にとって大切なことは、私たちが住むこの世界は、どこまでも、私たちが、私たちの「精神」によって再構成したものだということです。そこには、私たちの精神のあり方が、反映しているのです。

原子や遺伝子を操作することも、また、どこまでも互いにエゴを主張して争うことも、皆そうなのです。

自作詩短歌等選

ハンバーガーのせい

マクドナルドの
ハンバーガーを
食べ過ぎちゃって
肥満になったは
カロリー表示を
しないがわるいと
訴訟をおこす
米国人

日本も他山の石とせよ

農業の崩壊

かつて農業は
（一次産業）
人間生活の
根幹だった
でも今や
二次・三次産業に
じゅうりんされ
その犠牲となっている
それは
人間存在の根幹を
揺るがすということ
人間のこころを
荒廃させ
人間存在の基本である
家庭を
崩壊させている

不邪淫戒を尊重せよ

エイズ治療薬を巡って
知的所有権の保護か
エイズ患者の
人命尊重か
その二者択一が
問題となっている
エイズをなくす為に
不邪淫戒に基づいて
夫婦間以外の性交を
禁止する国際条約を
作ったらどうですか
そうすれば
めでたく
この問題は解決する

農産品の地産地消

食の安全保障は
自国の食糧確保
だけではなく
国際的に
食料で争わなくても
よいようにする為に
不可欠なのだ
それは
原則として
特定の地域で
作ったものを
その地域で
消費することが
必要なのだ
それを自給自足といい
新語では
地産地消という

精神障害者の処遇

欧米では
精神障害者も
隔離されないで
一般の人たちに混じって
生活している
だが
日本では
ほとんど見られない

日本人の他者への
無関心・無責任体質が
ここでも見られる

減反政策廃止

国が
米の減反政策から
手を引くという

ますます
米価は下がり
日本の農業が
つぶれていく

刑法犯過去最悪

最悪の
数字になった
刑法犯
どっと増えたり
子どもと外人

日本人の異常さ

右翼団体「一水会」の
顧問鈴木邦男という人が
毎日新聞に記事を載せ
次のように述べている

「5人を一度北朝鮮に
戻すと約束したのなら
政府は約束を破ったことを
北朝鮮にわびるべきだ」と

右翼でさえ
こう言っている
いや

右翼だから
言えることなのか

日本の社会の異常さ
人の道を通じない
社会になっている

差別蔓延する地球

かつて

エリザベス・
サンダーホームの
混血児たちは
ブラジルには

黒人差別がないといって
移民して行った

でも
いま厳然として
黒人差別があるという

悲しいかな
きれいごとは

いつでも
地球中で

民族対立があり
宗教対立があり
国家対立があるのだ

自作随筆選

なぜ閉塞感があるのか

産経新聞には、「正論」という欄があつて、毎日、指定された文化人の方が、入れ代わり立ち代わり評論を書いておられます。

十二月十一日は、作詩家・小説家の阿久悠氏の「第3の大病としての閉塞感 現状維持繰り返し『壁』厚くするばかり」と題するものでした。

この方のものは、何度か読んでいて、コメントしたくなあと思つていたのですが、何か、コメントをすると、揚げ足取りや、個人攻撃のようなものになるような気がして控えてきました。

ところが、十二月十八日の産経新聞でこの方が第3回「正論新風賞」をもらわれたことを知ると共に、そこに同氏の「紹介記事」と同氏自身による「受賞の言葉」があり、それらを読んで、先程の評論のコメントをやはり書かなければならないという気になりました。

この方の紹介記事の中に、次のような文があります。「この二十三年間、一日も欠かさず日記をつけている。

しかも、日記は『自己嫌悪も、自己陶醉も、自己確認もない。それらを意図的に排している』と。

また、同氏自身の受賞の言葉の中に次のような文があります。「他人の言葉を引き合いにして論じることが苦手である・・・下手でも、的外れでも、オリジナリティを尊ぶ」「熟練への接近よりも、未熟の輝きの発見が、体質的に好きなのである」「私は風見鶏ウオツチャードと思つている・・・ただし大切なのは無風の時で、私の感じる時代とか社会とか人間とかは、すべて無風の時の風見鶏への関心である」。

これだけの断片的引用だけでも、この方が、自分自身の内面的な心を覗き込むよりも、自分の外を自分の目を通して眺めるのが好きなことが分かります。その見え方にオリジナリティがある、と自負されているようです。

さて、この方の全般的な精神的傾向の検討はこの位にしまして、本題の「第3の大病としての閉塞感 現状維持繰り返し『壁』厚くするばかり」という評論の検討に移りたいと思います。

まず、この方の言われることを聞いてみましょう。

「それにしても、なぜこのような息苦しい、不機嫌な社会が出来上がってしまったのだろうか。正義の不在だろうか。社会に価値観がなく、大人に使命感がないためだ

ろうか。聖職者が居直るからだろうか。NO・1をリーダーにできないためだろうか。・・・（多くの人は）すべてのことをシステムに帰結させようとするくらいがある。・・・そもそも、よく考えてみると、法律とかシステムは必要悪である。人間がもう少し行儀がよくて、もう少し利口であれば、なくてすむものなのである。しかし、どう考えてもそこまでの利口さに達しないし、欲望のコントロールすらできない生物だとわかったところで、さまざまな約束を知恵で作ったものである。そもそもその程度のものであることを忘れて、システム依存症に陥るから、本来の人間の強さまで失う。」と。

長くなりますが、もう少し引用を続けます。

「つまり、悪平等に守られ、競争心を忌み嫌い、順列を悪とし、自立と孤立を同一視して、一人で生きる何らの訓練も受けていない子どもたちが、長じて、己が力を信じ、己が才で生きよ、自己責任こそが現代人の唯一の道徳である、といわれても困るだろう。・・・閉塞感はこのように、既にあつた生き方が否定された時に起こる。日本はそれが、政治も経済も教育も生活も、家族も男女間の愛情も、すべてのところに一気にきた。」と。

のつけから厳しいことを言うようですが、この方は、なぜ日本人の多くが閉塞感を感じるのか、について全く

分かつておられないように思います。ですから、また、その対策も間違つたものにならざるを得ません。

なぜなのか、少し検討していきます。

確かに、この方のおっしゃる通り、いま、「正義が不在」で、「社会には価値観がない」し、「大人には使命感がなく」、「聖職者が居直り」、「NO・1をリーダーにできない」状態に、日本が陥っていることは、間違いないと思います。（ただ、価値観のところは倫理観か道徳観の方がより適切のように思いますが。）

また、これらが「社会のシステム」をなすものであることは、この方は、直接に言及されていませんが、間違いないことだと思えます。

問題なのは、この方は、社会のシステムが変化してきた、つまり、ここに引用しませんでした、「終身雇用や年功序列の制度が解体」し、「自己責任こそを唯一の道徳」とする制度に変わってきた、あるいは「既にあつた生き方が否定された」のに、依然として、旧来のシステムに依存しているから、現在の閉塞感があるのだというのが、中心的な主張のようです。でも、この指摘が、私からみますと、全くの間違いなのです。

日本が、戦後の荒廃から立ち直つて世界に類を見ない繁栄を獲得したのは、アメリカ力によつて注入された自由

・民主主義による「自己追求」の奨励と、それまでに復古神道と儒教によって培われた日本固有の集団への忠誠心とによってなされて来たものなのです。

この方は「悪平等に守られ、競争心を忌み嫌い、順列を悪とし、自立と孤立を同一視」したことが、いま問題になっているかのように書かれています。実は、これこそが日本の文化の伝統であって、それが日本の経済発展を支えてきたものだと思うのです。「人が互いに平等で、競争ではなくお互いの協同を尊重し、人に順列を付せず、他者を排除するのではなく、お互いが支え合えるように、自立や孤立をさげ、終身雇用と年功序列を尊重する」ことで、日本の会社は丸となって利益を上げ得て来たのだと思うのです。一九八〇年代には、それは、能率のよい会社経営の世界的モデルであるとさえ言われたほどだったわけですから。

ところが、現在では、この方が言われますように、あるいは多くの方がそう思われていますように、この日本固有の文化こそが悪の根源のように言われるようになってしまいました。そこに問題が潜んでいるのです。

この方は、いま日本がシステム依存症に陥っているとおっしゃっていますが、私から見ますと、逆に、システム嫌悪症に陥っていると言いたいのです。

実は、社会的システムは私の理論でいいますと、他己をなすものなのです。引用のはじめにありましたような「正義の不在」や「価値観・使命感の喪失」や「聖職者の居直り」や「リーダーの不在」は、社会的システムの崩壊、他己の弱体化によって起こっているのです。正義や価値観（倫理観）や使命感などは、まさに他己そのものなのです。その崩壊によって社会全体が、自己社会となり、社会の秩序が失われ、社会が徐々に解体していつているのです。

私の構築した時間論でいいますと、難しいかもしれませんが、他己（法・伝統・慣習・正義・倫理など）は時間の過去の働きをします。また、自己は未来の働きをし、現在はその過去（他己）と未来（自己）の統合なのですが、今日の日本のように他己が喪失しますと、統合の一方の契機を欠くことで、統合不能となり、未来も未来の働きをしなくなってしまうのです。その結果、未来が塞がれた思い（閉塞感）がし、行動の全てが、刹那的になってくるのです。こうなりますと、連帯感や協同意識がなくなり、互いが孤立します。そこで有効な道徳は、唯一、自己責任（自業自得・見殺し）ということになってしまふのです。

この方は、引用にありますように、「法律とかシステ

ムは必要悪」だとおっしゃっていますが、社会を維持するためには、「法」は必要不可欠なものなのです。それは、人間精神の他己をなすもので、決して「悪」などではありません。いわば、人間の人間であるゆえんをなすものなのです。今これを喪失して、人間が生物化（動物化）していることこそが問題なのです。

私たちは、システム（制度）を嫌悪することなく、他己である「法」に依存するからこそ、行動を間違いない行うことができるのです。人間は、この方も言われる通り、「利口ではなく、欲望のコントロールすら出来ない生物だ」からこそ、常に、法に外れていないか、欲望に流されていないか反省することで、はじめて、悪を為さないで、善を為すことができるのです。

では、そもそも、なぜ日本人に他己の弱体化、システム嫌悪が起こつて来たのでしょうか。

本誌の熱心な読者の方には、もう何度も書いてきましたので、お分かりだと思いますが、それは日本人から公的には信仰が完全に失われ、自由・民主主義のみが、自分を支える思想と思うようになってきたからなのです。

何度も言いますように、自由・民主主義は、自己追求の原理しかもっていません。全く他己の原理を欠いているのです。つまり、社会の秩序を維持する働き、難しい

ことを書いて恐縮ですが、フランスの社会学者のデュルケム（一八五八―一九一七）の用語を用いていますと、「アノミー（社会的混沌状態）」を避ける働きの原理をもっていないのです。

ですから、自由・民主主義が進行するほど、人々は、自己を主張し、自己に閉じて互いに孤立し、連帯感を失っていきます。いま、日本がそうなっています。

この方は、日記では「自己嫌悪も、自己陶醉も、自己確認もない。それらを意図的に排している」とされていますが、まさに民主主義的価値観そのものだと思えます。

私は、大学での授業の初回に必ず、「私の授業では知識を得てもらうよりも『自己を覗き込み、自己を反省してもらうこと』を期待している」と言っています。

人間が、人間らしくなるためには、これ以外に方法がないからなのです。ソクラテスは「汝自身を知れ」と言いましたが、至言です。

教育者（聖職者）として、人間らしくなるためには、自己をどこまでも覗き込んで、人間の真実に至る努力を怠ってはなりません。それが、他己を回復する道なのです。そうしているとき、この世のことがよく見えてきて、教育者として自分では善いことをしていると思つて悪をなさないですむのです。

釈尊のごとば（一一九）

法句經解説

（三六九）修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと怒りとを断つたならば、汝はニルヴァーナにおもむくであろう。

この舟とは何なのでしょいか。また水とは何なのでしょいか。

この偈の最後のあたりに、「貪りと怒りとを断つたならば」とありますから、水とはそうしたものだと言えます。つまり、これは、十善戒の八番目と九番目、不慳貪と不瞋恚に当たっています。ですから、もしこれに最後の「不邪見を加えますと、いわゆる三毒（貪瞋癡）と言われます、私のモデルの「こころ」が為す悪を戒める戒律となります。そうしますと、舟とは、私たち一人一人の人間ということになると思います。

さて、こうした三毒を断つならば、私たちは、ニルヴァーナにおもむくことができる、教えています。

ニルヴァーナとは、漢訳で平安とか涅槃寂靜とされています。それは、煩惱の火を消し去ったこころの状態を

言う言葉です。

私の理論では、そういうこころの状態は、無意識＝意識の生命蔵識＝精髄（煩惱）と如来蔵識＝神髄とが統合されたとき実現されます。

そのためには、この偈でいいますように、意識領域の「こころ」の執らわれを捨てる戒律を含む、例えば十善戒を守る努力をすると共に、ヨーガに励まなければなりません。

真言密教の僧侶であれば、いま解説していますが、『即身成仏義』の教えの通りに、ひたすら瑜伽行（ゆがぎょう）に励まなければなりません。あるいは、禅宗ですと、ひたすら坐禅に励まなければなりません。

そうしている時、はじめて、ニルヴァーナに達することができるとは、確かには、現代人のようにあらゆるものが計算づくめ「取引」となっている人間には、難儀なこと、なかなか納得でき難いところなのです。

ニルヴァーナは「取引」して達することができる境地ではありません。どこまでも、ただひたすらに聖者の教えを信じ、その教えの通りに精進する以外に、道はないのです。

後記

- 一、明けましておめでとうございます。
- 二、早々に年賀状を下さいました読者の方々に、紙面をお借りしてお礼申し上げます。失礼ながら、どなたさまにも年賀状はこちらからは一切、お出ししておりません。お許し下さい。
- 三、今年は、とても寒い日が続いています。この讃岐でも、池に氷がはつています。私の畑の池も薄く氷がはりました。こちらに来てはじめてのことです。
- 四、お大師さんの『即身成仏義』は難しいでしょうか。私は自分の書いたものを読み直すことは、あまりないのですが、この『即身成仏義』の解説は、その部分だけを『ここらのとも』の全体からは切り離して、別冊にし、読み直しています。同じことを何度も書きそうですので、それを避ける意味もありますが、引用する経典などが入り組んでいますので、それを確認したりする目的もあります。みなさんも、何度か、読みなおして頂ければ、得るところが、必ずあるのではないのでしょうか。
- 五、このところ、大学を定年退職する日までのことを強く意識しています。あと一年三ヶ月残されていますが、その後、この『ここらのとも』の発行をどうするかなど、いろいろ思索しています。いまの予定では、大学在職中

は少なくとも、発行したいと思っています。

- 六、また、退職後は、自分の書いた論文などを英語に翻訳して行きたいと思っています。そのため、英作文に慣れたいと思い、英文で日記を書いています。いま二カ月余り続きました。もう少し慣れてきたら、インターネットの英語版を作って、自分の論文などを翻訳し、そこで公開できたらと思っています。

七、これが、私の新年にあたっての抱負です。

- 八、使い古された言葉で、恐縮ですが、世界はますます「不透明感」を強めています。日本人は、世界情勢音痴とも言えるほど、それに、うといように思えます。

月刊 ここらのとも 第十四巻 一月号 (通巻 一五七号)	平成十五年一月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしと</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	